話法と思考の表出のモードとその喜劇的効果

松田 麻利子

Modes of Speech and Thought Presentation and Their Comical Effects

MATSUDA Mariko

桜美林大学
桜美林論考『言語文化研究』創刊号　2010年3月

The Journal of J. F. Oberlin University
Studies in Language and Culture, The First Issue, March 2010

SUMMARY

Novelists use a variety of modes of speech and thought presentation for the purpose of manipulating the readers' perception of the characters in the texts. Readers judge and evaluate the characters not only by what the characters do and say, but also from how the characters' speech or thought are presented by the narrator. In this paper, I would like to look into the modes of speech and thought presentation, and their effects on the understanding of the characters, mainly when they are used to produce comical irony and elicit mirth. Examples are taken from *Pride and Prejudice* and *To Kill a Mockingbird*. Although it is generally accepted that speech presented in free indirect form has a distancing and ironical effect, other forms such as direct speech and narrator's report were also found to be used to intensify a similar effect. Moreover, it has been observed that various forms of speech and thought presentation can be used not only for economy, variety and avoiding monotony, but to show the balance of the narrator's and the character's involvement. While free indirect thought / speech presentation is sometimes confused with pure narrative, to recognize these forms helps to differentiate the voice of the narrator from the characters, thus enhancing the understanding of the text.

0. はじめに

物語の面白さは何が語られているかだけでなく、いかに語られているかによって左右される。三人称の語りか、一人称の語りか、誰のどのような視点で書かれているのかで同じ出来事もまったく違ったものになる。人物を描くのにはその人の言葉や考えを示すのが最も有効な方法だが、作者はその際に直接話法、間接話法、自由間接話法を始めとするさまざまな話法を組み合わせて使うことで、登場人物に対する読者の反応を操作している。

そこで、小論ではさまざまな発話や思考の表出の話法が、小説のどのような場面で使われ、読者にどのような心的状態を示すことに寄与しているかを見てゆきたい。1章ではLeech & Short（1981）のspeech and thought presentationのカテゴリーにしたがって、文章の理解に重要な役割を果たす話法についてその効果と理由を検証する。発話や思考の表出方法のカテゴリーについて論じる場合、speechとthoughtを合わせてdiscourseとして扱われることも多い[1]。しかしLeech & Shortは、直接話法と間接話法の中間領域を占めるFree Indirect Speech（以下FIS）とFree Indirect Thought（以下FIT）について、この二つは統語的には似た形をとるものの、もたらす効果はむしろ反対の特徴を持っていることを指摘し、この二つを区別して詳しい分析を行っている。この区分に沿っていくつかの作品中の実例から、話法の違いが読者に与える効果を検証する。2章では、Jane Austenの*Pride and Prejudice*の中で、愚かな笑われるべき登場人物にどのような話法が使われているかを観察する。自由間接話法はこの作品にはまだ多くは使われていないが、この軽やかな諧謔精神に満ちた作品において、作者は自由間接話法以外にもさまざまなspeech presentationを繰って、登場人物に対する笑いを含んだいかにも楽しげなナレーターを作り出し、登場人物の人物像をたくみに表現している。3章では*To Kill a Mockingbird*をとりあげ、FISやFITをはじめとする発話と思考の表出のモードによって、ナレーターの視点と声の操作がどのように行われて笑いを誘うのか、それぞれの効果を検証する。また、学習者に話法とその効果に注意を向けさせることが、大学レベルでの指導において、あらすじの理解だけで満足しない読解力養成と、文学に対する興味を繋ぐ手段の一つとなるよう、その方法を模索することを今後の課題としたい。

1. Speech and Thought Presentation のカテゴリーとその効果

Leech & Short（1981）は発話や思考がどのような話法で再現されるかを、ナレーターの解釈や介入がもっとも多いものから、ナレーターの存在が消えて登場人物の発話や思考そのものが提示されるものまでを、以下のようにスケール、または連続的推移線（cline）上に左から順に並べている。

発話：	ナレーター	←	NRSA	IS	FIS	DS	FDS	→	登場人物
思考：	ナレーター	←	NRTA	IT	FIT	DT	FDT	→	登場人物

それぞれの省略名称は以下のとおりで、本稿中では省略名称を用いる。

NRSA / NRTA : Narrator's Representation of Speech/Thought Acts [2]

IS : Indirect Speech, IT : Indirect Thought,

FIS : Free Indirect Speech, FIT : Free Indirect Thought

DS : Direct Speech, DT : Direct Thought

FDS : Free Direct Speech, FDT : Free Direct Thought

NRSA は、発話行為の言葉は再現されず、会話のトピックのみが示される表出方法である。"He thanked her" のようにある発話があったこと、およびその主旨程度は示されているが、詳細や実際の言葉はまったく再現されないもの、いわば要約を指す[3]。DS を showing の手法とすれば、NRSA はナレーターによる要約となり、tellingにあたるものである。物語の大切な部分においてはDSが使われるのに対して、NRSA は重要でない部分で冗長になるのを避けるために使われる。この表出方法の効果としては、読者に登場人物との心的距離感をあたえ、アイロニーを生み出す。登場人物の発話が丁寧にそのままに提示されるDSに対して、発話の内容が詳細に示されないことから、取るに足りないこととしてあしらっているナレーターの姿勢が伝わるからである。NRSA に比べればDSに寄っているFISの効果について、Flavin（1985: 31）は、"words as heard by some consciousness" つまり、発話そのままを伝達しているというよりも、他の登場人物からどのように受け取られているかが示されている、と言うBanfield（1973）の意見を引いている。FISよりも更にナレーターの介入の多いNRSAにおいてこれを当てはめれば、NRSAで表出される発話というのはナレーターのみならず、他の登場人物からもつまらないものと受け取られ、軽んじられていることが示されることになる。Short et all（1996: 117）はNRSA およびNRTAについて "summarizing and backgrounding / distancing effect" を持つと述べている。NRSA は、showingの手法であるDSが使われたらば、冗長で退屈になるであろう取るに足りない会話を要約して、物語をスピーディに進めるとともに、その発話と人物を軽んじているナレーターの態度を示し、滑稽味を出すことも可能にしている。

ISは、ナーターを介して、どのような内容の発話があったのかが伝達されるために、読者と発話者の間に距離感が生まれる。McHale（1978: 259）の分類では、ISに当たる部分を、発話に使われた言葉は再現されないIndirect content paraphraseと、元の発話の言葉がある程度再現されているIndirect discourse, mimetic to some degreeに分けている。

FISは、Indirect SpeechとDirect Speechの 間のcline上のさまざまな位置で起こる。McHaleはfree indirect discourseの "free" の意味について、主節の支配から自由であることと、"its range of formal possibilities is extremely large."（McHale, 1978: 253）とのべ、形式の自由さも特徴であるとしている。FISの効果としては、一般的にFITが登場人物に対する読者の共感を引き起こすためにナレーターが共感をもって描く人物に使われる一方、FISはナレーターと登場人物との間に精神的な距離を感じさせ皮肉なニュアンスを帯びるため、好感の

持てない人物、または愚かな喜劇的人物に使われるという傾向があると言われている。

FISでは時制や人称は多くの場合、地の文の語りにあわせ（一般的には過去形、代名詞は三人称）、伝達節を省き、疑問形などに見られる倒置はそのまま残すのが一般的な形である。Toolan（2001: 130）はFISとFITを合わせてFID（Free Indirect Discourse）という呼び方を使用し、FIDをナレーターの時制と代名詞を持ち、伝達節を欠き登場人物のdeixisと言葉遣いの彩りを持つもの、とまとめている。FIDは統語的特徴のみでは特にnarrator's reportと紛らわしい点を指摘し、FIDを見分けるための指針として登場人物の心的態度を示すmodalityの存在と言語的彩りをあげている。また、McHale（1978: 269-70）は、FIDと認識されるための指針として、Grammar, Intonation, Context, Idiom, Registerをあげているが、特にIdiomとRegisterについては“spokenness”あるいは“speaking voice”の存在を示唆する語彙として、oh, ah, yes, of course, after all, surely など、また、名詞に前置されるpoor, dear, damnedなどの価値判断を示す形容詞の存在を挙げている。また、ナレーターの声とは相容れないレジスターの場合もFIDであることを示す指針となると述べている。形式上ではひとつの決まった形を取らないのがFISであり、見落しやすいFISの例として初期のAustenの作品にあらわれる引用符のついた、一見DSの特徴を持つものがある。また、ナレーターが一人称の場合は、FISであっても代名詞は当然一人称のままであり、これも見落としがちなFISとなる要素である。以下の引用の下線部はnarrator's reportと紛らわしいが、He（主人公の裕福な女性を非常に鄭重に遇する店主）のFISと見るのが自然だと思われる例である。

To-day it was a little box. <u>He had been keeping it for her. He had shown it to nobody as yet.</u> An exquisite little enamel box with a glaze so fine it looked as though it had been baked in cream. （Katherine Mansfield “A Cup of Tea”）

FITはナレーターが登場人物と同化した視点から書くことで登場人物に対する読者の共感をひきおこすのに対し、FISの使用が登場人物に対する心的距離を感じさせることについて、Leech and Short（1981: 334）は次のように説明している。登場人物の発話をあらわす方式の基準となるのは、発話そのものを伝えるDSが自然の形であるべきであり、それに比べて、IDの方向に寄っている、つまりナレーターの介入、コントロールの多い側に寄ることで、FISはDS に比べて登場人物に対する心的距離感とその結果としてアイロニーを生む結果となる。したがって物語の展開上きわめて大事な部分、またナレーターが共感を寄せる人物はDSで示して、FISは重要度、あるいはナレーターの思い入れのレベルがそれよりも低いときに使われる、というものである。先に述べたとおり、FISのこうした距離感が更に広がったものがISでありNRSAとなる。

以下の引用下線部は、結婚を回避したくなった男が、相手から婚約破棄を言い出させるために、家探しを延々と長引かせる場面である。 Rogerの言葉が誠意のないうわべだけ

のものであることが、FISによってたくみに表されている例である。

House-hunting is a tiring and a tiresome business and presently Ruth began to grow peevish. Roger begged her to have patience; somewhere, surely, existed the very house they were looking for, and it only needed a little perseverance and they would find it.（W.S. Maugham、“The escape”）

DS は、引用符を持ち、伝達部を伴い、発話の内容と使用された言葉をその通りに再現する。登場人物の言葉遣い、彩りがそのまま伝達され、人物の性格を直接的に読者に伝えることができる。DSは丁寧な描写と言うことができ、より重要な部分、強いインパクトを与えたい部分に使われ、Leech and Short（1981）はDSは好意もって描かれる人物に使われると述べている。しかしその人物に対するナレーターの態度を鮮やかに示すことができることから、強い皮肉や非難の感情を伝える際にもDSが使われる例は、後述するように多くみられる。

FDSは、引用符と伝達節のどちらか、または両方を欠くもので、地の文の中にせりふだけがそのまま現れる。小説では、被伝達節のすべてに伝達節をつけることによる繰り返しと冗長さを嫌って、しばしば伝達節を省略し会話だけを列挙する方法が用いられている。

以上、発話（S）の表出形式について概観したが、思考（T）の表出形式については発話の表出に准ずるため、その効果が発話の場合と異なるFITについて述べるにとどめる。

FITが読者の共感を引き起こす理由について、Leech and Short（1981: 344-5）は、人の心の中の思考は他者からは知り得ないものであるので、思考表出の基準（norm）はDTではなくITであり、FITは基準となるITよりも登場人物寄りの位置にあるために、登場人物に対する共感を呼ぶのだと説明している。Flavin（1985: 35）はこれへの反論として、20世紀以前に多いintrusive narratorの役割を考えると、現実と異なるフィクションの世界ではやはり基準はDTであり、Leech and Shortの考え方は現実とフィクションの二つを混同したものだとしている。思考表出の基準がDTかITかで両者は食い違うが、DTを人工的なものと見ている点では意見を同じくしている。FITの利点は “keeping much of the vividness of DT without the artificiality of the ‘speaking to oneself’ convention.”（Leech and Short, 1981: 345）である。思考表出の基準がどうであれ、ITおよびDTと異なり、ナレーターの存在を顕在化する伝達節を欠くことから生まれる作為のなさがFITの利点であると考える。ここでStream of consciousness（SOC）と比較して考えると、SOCは、言語化される以前の、聞き手を想定しない心の中に浮かんだままを表すものであるため、一読してわかりにくいが、登場人物の心中を最も自然に近い状態で表すことができる点で、演劇上の工夫である人工的なモノローグとは対極のものとなる。FITは言語化されていない印象を与えるため、自然さにおいてSOCに近い。DTやFDTのように思考が言語化されたために生まれる作為的な

感覚に比べ、FITは本音に近いものを聞いている気持ちを読者に与えるのであろう。FITは、作為や伝達節によるくどさを除きつつ、かつある程度のナレーターのコントロールにより整えられているために、わかりやすさを減じることなく登場人物の心の中を自然に伝える方法として効果的であると考えられる。しかし登場人物の思考が直に伝わることから、それが共感をよぶか、強い反感をひきだすかは、視点人物をどのような人物とするか次第である。たとえばDahlはその皮肉や非難の態度を読者から引き出すためにもFITを用いている。

FITはnarrator's reportと紛らわしい点でもFISと同様であり、FITであることを示す指針もFISの場合と同様である。以下に、FITとFISが効果的に、しかも混合で用いられている例として、Dahlの "Lamb to the slaughter" からの引用をあげる。突然夫から別れを切り出され、冷凍ラム肉で夫を撲殺した後の主人公の心理状態が、一見narrator's reportと紛らわしいFITで描かれている例である。

All right, she told herself. (1) So I've killed him. (2)

It was extraordinary, now, how clear her mind became all of a sudden. (3) She began thinking very fast. (4) As the wife of a detective, she knew quite well what the penalty would be. (5) That was fine. (6) It made no difference to her. (7) In fact, it would be a relief. (8) On the other hand, what about the child? (9) What were the laws about murderers with unborn children? (10) (Dahl "Lamb to the slaughter")

文章 (1) (2) はFDT、(3) はナレーターの声と見ることもできるが、now という語の存在や、extraordinaryという評価を表す標識の存在が目印となって、登場人物sheのFITと取るのが自然である。(4) (5) はナレーターの声だが、(6) 以下はすべてFIT と考えられる。夫を殺した後の彼女の思考であることが、ナレーターの声としての他の文よりも短い文が使われていることからも表れている。このように登場人物の偽らざる本心がFITによって描かれている。

それに対して現場に駆けつけた夫の同僚である刑事との悲劇の妻を装う下の引用中の会話部分では、読者には周知の殺人の状況を彼女の脚色を交えて繰り返すために、NRSA, IS, FISを組み合わせて冗長さを防いでいる。 彼女を気遣う刑事に対する以下の引用中の応答はFISが使われており、偽りの言葉を表現するのにふさわしい。(1) は統語的にはnarrator's reportと変らないが、文脈とevenという感情の入った語彙から考えてFISでなければならない例である。(2) は典型的なFISの特徴を備え、(3) は she really didn't が繰り返される "spokenness" がFISの特徴を強く示しているといえる。

She didn't feel she could move even a yard at the moment. (1) Would they mind awfully if she stayed just where she was until she felt better? (2) She didn't feel too good at the moment, she

really didn’ t. (3)（Dahl, “Lamb to the Slaughter”）

2. *Pride and Prejudice*のコミカルな登場人物の表現

自由間接話法を本格的に使い始めたのはJane Austenだと言われている[4]。Flavin（1985: 5）はAustenの場合も初期の*Sense and Sensibility, Pride and Prejudice*（以下*P&P*）などでは、FIDの使用は偶発的な話法の混乱から生じたようにも見え、成熟した使用は後期の作品を待たねばならないと述べている。事実、*P&P*では紛らわしいFISが多く、意図的にFISを使ったというよりも混乱から生じた可能性も否定できない。

*P&P*中の愚かでコミカルな登場人物、Mrs.BennetやMr.Collinsの発言に対してはどのような表出が使われているだろうか。ナレーターによるからかいや皮肉が込められるFISが多用されると予想されるが、Flavinの指摘するようにFISの例はまだ少なく、彼らの発言で最も多いものはDSである。FlavinはAustenの作品中の各発話形式の出現回数を数えており（Flavin, 1985: 253）、*P&P*の登場人物中FISの例が多い順に、Mrs. Bennet 7回、Mr. Bingley 5回、Mr. Collins4回、Elizabeth 3回、Mr.Gardner, Caroline Bingley各2回、Charlotte Lucas, Jane　各1回である。DSに関しては、当然ヒロインのElizabethが最多の50回、次がMrs.Bennetの39回、Mr. Collinsは20回、Darcyが29回に対しBingleyは9回である[5]。Flavin（1985: 88）は、Mr. BingleyのDSが9回に対しFISが5回という数の多さについてBingleyが笑われるべき愚か者であるというわけではないが、あまり聡明な人物ではなく、その欠点が露呈されないためにDSを少なめにし、FISを使うことで読者にその欠点が悟られることを回避しているのだと述べている。このことはMrs.BennetやMr.Collinsに対してDSが多く使われていることの説明にもなる。つまり、DSは共感を寄せる人物に対して使うだけでなく、充分な人物描写をするべく使われるため、彼らの場合は存分にその愚かさを描き出すための方法として、DSが効果的な表出方法となるわけである。

このように、*P&P*では皮肉やからかいを表すためにさまざまな話法が駆使されて人物造形がなされている。愚かさをshowingで強調するDSとともに、以下の例のように著者の断定によるtelling の手法によっても、人物評価を誤解の余地なく伝える工夫をしている。以下はMrs.Bennet とMr. Collins についてのtelling によるnarrator’s report である。

> Her mind was less difficult to develop. She was a woman of mean understanding, little information, and uncertain temper. When she was discontented she fancied herself nervous. The business of her life was to get her daughters married; its solace was visiting and news. (P&P: 7)

> Mr. Collins was not a sensible man, and the deficiency of nature had been but little assisted by education or society; . . . and the respect which he felt for her high rank, . . . , mingling with a very good opinion of himself, of his authority as a clergyman, and his rights as a rector, made

him altogether a mixture of pride and obsequiousness, self-importance and humility. (P&P: 61)

NRSAはAustenの時代の作品には多くみられ、好意的に描かれていない人物に対してよく使われる。以下は登場人物の会話の内容を、退屈で真剣に聞く価値のないものとして扱っている周囲の登場人物とナレーター双方の態度がNRSAによって示されている例である。1)はパーティの報告を、聞く気のない夫に報告しているMrs.Bennetの発話のようすであり、2) は、姉Janeの病状に対し、大げさに、しかし誠意のない気遣いの言葉を繰り返すBingley姉妹の言葉が、Elizabethの感覚を通して聞かれたものとして示されている。どちらの場合も、読者はナレーターの態度だけでなく、他の登場人物の飽き飽きした気持ち、あるいは辟易している様子をNRSAの使用からうかがい知ることができる。

1) Here she was interrupted again. Mr. Bennet protested against any description of finery. She was therefore obliged to seek another branch of the subject, and related, with much bitterness of sprit and some exaggeration, the shocking rudeness of Mr. Darcy. (P&P: 14)

2) The sisters, on hearing this, repeated three or four times how much they were grieved, how shocking it was to have a bad cold, and how excessively they disliked being ill themselves; and then thought no more of the matter: (P&P: 32)

3) The dinner too in its turn was highly admired; and he begged to know to which of his fair cousins, the excellence of its cookery was owing. But here he was set right by Mrs. Bennet, who assured him with some asperity that they were very well able to keep a good cook, and that her daughters had nothing to do in the kitchen. He begged pardon for having displeased her. In a softened tone she declared herself not at all offended; but he continued to apologise for about a quarter of an hour. (P&P: 57)

3) ではNRSAと ISが使われている。受動態の使用も加わり、Mr. Collinsに対する読者の心的距離感を増すとともに、彼が軽んじられている様が際立つ。IS中の “his fair cousins” は明らかにMr.Collinsの語彙をからかいをこめて模倣しており、彼のもったいぶった語彙も再現されておかしさを出している。また、「15分間続いた」謝罪がNRSAで処理されることで、くどくどと失言をわびる彼の発言を誰も本気で取り合っていない状況を示し読者の失笑を誘い、Mr.Collinsの喜劇的要素を増すことに成功している。このようなNRSAは、実際には長時間にわたって行われたであろう発話をコンパクトにまとめることで、物語の進行を早め、効率よく多くのことを語る効果があるだけでなく、その人物の特徴的な部分が凝縮されてより際立つ結果となり、アイロニーが増すことになる。

次にFISの例をあげる。Mr. Collinsが尊敬してやまない後援者についての賛辞を述べ続ける長いFISの一部である。このように多くの場合、ISで始まり、次第に伝達節を省略することで下線部のFISの形になってゆく。長いせりふにその都度伝達節を入れる煩雑さと繰り返しを避けるために伝達節を省略した結果として、FISが生まれたとも考えられる。

The subject elevated him to more than usual solemnity of manner, and with a most important aspect he protested that he had never in his life witnessed such behaviour in a person of rank—such affability and condescension, as he had himself experienced from Lady Catherine. She had been graciously pleased to approve of both the discourses, which he had already had the honour of preaching before her. She had also asked him twice to dine at Rosings,. . 中略. and had once paid him a visit in his humble parsonage; where she had perfectly approved all the alterations he had been making, . . (P&P: 58)

以下のMr.CollinsがMrs.Phillipsを褒め称える部分も、やはりISから下線部のFISの形へと変化している。また、このFISも統語的にはnarrator's reportとも取れるものの、内容とyet, so muchなどの 語彙によりFISと判断するのが妥当な例である。

He protested that except Lady Catherine and her daughter, he had never seen a more elegant women; for she had not only received him with the utmost civility, but had even pointedly included him in her invitation for the next evening, although utterly unknown to her before. Something he supposed might be attributed to his connection with them, but yet he had never met with so much attention in the whole course of his life. (P&P: 64)

Mr. Collins 以外のFISの例も見ておきたい。FISはnarrator's reportと紛らわしいものが多い。下の例は、Mr. Bingleyについてのナレーターの説明とも取れるが、価値判断を表す形容詞、感嘆符、会話調の文体などから、Mrs. Bennet を含む、彼女と価値観を共有するこのコミュニティーの人々のさまざまな言葉をまとめて、凝縮したFISと考えられる。

He was young, wonderfully handsome, extremely agreeable, and to crown the whole, he meant to be at the next assembly with a large party. Nothing could be more delightful! To be fond of dancing was a certain step towards falling in love; and very lively hopes of Mr. Bingley's heart were entertained. (P&P: 11)

次の下線部もMr. Bingleyがパーティに出席できないと知ったMrs. BennetのFISと受け取るのが自然であり、直前の文がMrs.Bennetの気持ちを記していて、次にFISがあらわれることを示唆する橋渡しとなっている。

. . Mrs. Bennet was quite disconcerted. She could not imagine what business he could have in town so soon after his arrival in Herfordshire; and she began to fear that he might be always flying about from one place to another, …（P&P: 11）

次も、統語的にはnarrator's reportと変らないが、感情を示す語彙、いわゆる "spokenness" などから、パーティに感激しているMr.BingleyのFISと判断すべき例である。

Bingley had never met with pleasanter people or prettier girls in his life; every body had been most kind and attentive to him, there had been no formality , no stiffness, he had soon felt acquainted with all the room; and as to Miss Bennet, he could not conceive and angel more beautiful.（P&P: 17）

このようにFISは形式的特徴だけでは明らかでないものが多い。下記のように引用符を残しながら、その中で統語的にはFISの特徴を示す形もAusten が辛らつな表現手段としてしばしば用いている。引用符をもちながら人称や時制がISの形を取るためその顕著なズレが心的距離感を増すとしている（Leech and Short, 1981: 327, Short, 1996: 309）。下記は長女のJaneに結婚が決まりそうなことをMr.Collinsに伝えているMrs.BennetのFISである。引用符つきのFISに加えて、不完全な文がハイフンで列挙されている。Page（1972: 30）はAustenのDSにみられる "conflated dialogue" として、複数の相手に対する発話を相手の返答を省略してまとめたり、本動詞を省いて断片を列挙する例を挙げている。その効果は "an ironic comment on the speaker's wearisome volubility" としているが、同じ効果は、Mr. Collins側からの応答を省略し、Mrs.Bennetの多弁な説明の断片のみをハイフンをはさんで列挙しているこのFISにも発揮されている。Mrs. Bennetのいつもの饒舌ぶりが凝縮されて彼女のいわばエッセンスを強く印象付ける効果をあげている。

. . . , a caution against the very Jane he had fixed on.― "As to her younger daughters she could not take upon her to say – she could not positively answer—but she did not know of any prepossession; —her eldest daughter, she must just mention—she felt it incumbent on her to hint, was likely to be very soon engaged."（P&P: 61-2 ）

以上見てきたように*P&P*では、コミカルで愚かな人物を表すのにふさわしいはずのFISの使用例は確かに少ない。しかしこの時代の作品ではそれを補って、FISよりも更にナレーターのコントロールを強め、登場人物の発話を自在に操ることのできるNRSAが多用されたことがわかる。 要約的性格が強く、物語の進行を速めることのできるnarrator's report やNRSAを使う一方で、彼らの愚かさをより印象づけるためには、強いインパクトを与えられるDSによる丁寧な時間をかけた描写を用いて示し、単調になることを避けている。また

NRSA ではナレーターの彼らに対する態度がにじみ出ることで、読者にナレーターとのいわば共謀関係を持っている気持ちを味わわせる効果を挙げている。

3. *To Kill a Mockingbird*におけるナレーターの視点と声の操作

次にFISよりFITが主流になっている20世紀の小説において、FISが効果的に使われている例としてHarper Leeの*To Kill a Mockingbird*をとりあげ、FISやFITをはじめとする発話と思考の表出モードの使い分けによって、ナレーターの視点（point of view）と声（voice）の区別が効果的になされている例を検証する。この作品は、Harper Lee の唯一の小説であり、ナレーターであるスカウトが6歳から8歳だった1932年からの3年間、不況と人種差別の只中のアラバマ州での出来事を成人してからの回想の形で綴っている。父親が弁護した黒人青年が、無実にも関わらず当時の南部社会の掟とそれに縛られる陪審員によって有罪とされる事件をクライマックスに、そうした社会での主人公兄妹の成長が描かれている。訴えるところは深刻なものであるにもかかわらず、ユーモラスな描写が随所に見られる。それは自分に対して、また、のどかだが偏見に満ちた小さな町の人々に対する子供のスカウトの視点による、あたかも意図せず生まれたような皮肉が醸し出すユーモアであり、出来事そのものよりもその語り方の魅力によるところが大きい。　今回はこの作品の中の語りの表出全体ではなく、それが視点と声との操作に関わる部分のみをとりあげる。

小説の語りを考える場合、視点と声とは区別しなければならない。視点人物を一人に絞っている三人称の語りの場合でも、必ずしもその声はその人物の語彙や文体とは限らない。視点と声を一致させると、幼い子供や、成熟した語彙を持たない人間を視点人物にすえた作品は言葉足らずのわかりにくいものになる[6]。*The Catcher in the Rye*のように、一人称の語りではこの二つが重なって視点人物が自分の声で語る場合も多いが、*To Kill a Mockingbird*のように年月を隔てた回想による一人称の語りでは視点と声を分けることが可能であり、子供のスカウトと、回想を語るナレーターの視点と声が使い分けられている。

*To Kill a Mockingbird*において、視点は主に子供のスカウトのものである。しかしそれを語る声は場面によって大人の声と子供の声の間を行き来する。FISとNRSAが使われると、登場人物としての子供の視点を通して見たことを、大人になったナレーターから語ることになり、その出来事に対する距離感、皮肉なユーモアが生まれている。またFITが使われると子供の声を再現することで視点と声が重なって読者は子供のスカウトにより共感することができ、また同時に、その気持ちをナレーターのものでなく、当時のスカウトの気持ちとして示すことで、1930年代当時ならではの状況やその中に生きていた子供の反応を自然に読者に伝え、理解させる効果を生んでいる。

この作品にもDSは多い。詳細なDSはクライマックスをなす裁判の場面にはもちろん、町の婦人たちのお茶会での偏見に満ちた会話ではその口調や個人の癖までも再現して使われる。これらにDSが使われるのは、子供のスカウトが聞き取った通りの発話を解釈をはさまず、理解できない部分もそのままに読者に提示するためである。これにより読者は大人

として状況を理解しつつ、登場人物である子供がその場の状況の意味をつかめずにいる面白さを味わうdramatic ironyを楽しむことができている。

スカウトが聞いたそのままが提示されるDSに対して、FISやISが使われる部分は、彼女が内容を理解し咀嚼した部分、または当時を振り返る大人になったナレーターが介入し、からかいをこめた注釈を加える余裕を持って語っていることを示す。これらは以下に示すFISのように、1）では子供たちが幼いゴシック趣味をむき出しに隣人のBooに対して勝手な想像を働かせている部分に、2）では、妹の世話をする責任があるから危険を冒すことは避けたい、と言い訳するJemの臆病を見透かして、Jemの言葉のエコーのように使われている。3）ではその兄がスカウトに小学校入学後の心得を説く言葉がFISで語られ、当時のスカウトが皮肉っぽく軽く聞き流しているおかしさが伝わる。

1）Jem gave a reasonable description of Boo: Boo was about six-and-a-half feet tall, judging from his tracks; he dined on raw squirrels and any cats he could catch, . . .; his eyes popped, and he drooled most of the time.（*To kill a Mockingbird*, 13. 以下引用は同書より）

2）Beside, Jem had his little sister to think of.

When he said that, I knew he was afraid. Jem had his little sister to think of the time I dared him to jump off the top of the house: “If I got killed, what’d become of you?” he asked.（14）

3）Jem was careful to explain that during school hours I was not to bother him, I was not to approach him with requests to enact a chapter of *Tarzan and the Ant Men*,. .中略. . I was to stick with the first grade and he would stick with the fifth. In short, I was to leave him alone.（16）

4）は世捨て人の隣人見たさにさまざまな企てをする子供たちへの、父親Atticusの長いお説教の抜粋である。DSに比べて速さ、簡潔さ、圧縮感が出て、次々に繰り出される叱責を聞いている側の気持ちと、ナレーターとして過去の自らの愚行を笑うからかいの気持ちがFISによって表現されている。5）は、父親の禁止にも関わらず夏休み最後の夜に隣人Booの家を覗きに行く企てについて、なぜそれが今夜なのかをスカウトに説明している兄Jemのせりふである。このいかにも子供じみたおかしな理屈に対するナレーターの態度が、FISの使用により表されている。6）は町のゴシップ屋の女性がスカウト達に無遠慮に裁判に関する質問を浴びせかけている場面であるが、ハイフンで示される完結していないFISの繰り返しは、聞き手の側が、この話し手に特徴的な執拗な好奇心に辟易している批判的な、かつ、話をいい加減に聞いている態度が示される。また、おそらくは、今回に限ったことではないこの女性に特徴的な会話のサマリーとして、最も典型的な部分が凝縮されたものである印象を与え、彼女の性格を強調している。

4）What Mr. Radley did was his own business. If he wanted to come out, he would. If he wanted to stay inside his own house he had the right to stay inside free from the attentions of inquisitive children, which was a mild term for the likes of us. How would we like it if Atticus barged in on us without t knocking, when we were in our rooms at night? . . 中略 . . Furthermore, had it never occurred to us that the civil way to communicate with another being was by the front door instead of a side window? Lastly, we were to stay away from that house until we were invited there, . . (49)

5）Because nobody could see them at night,. . 中略. . because if Boo Radley killed them they'd miss school instead of vacation, and because it was easier to see inside a dark house in the dark than in the daytime, did I understand? (51)

6）Miss Stephanie's nose quivered with curiosity. She wanted to know who all gave us permission to go to court—she didn't see us but it was all over town this morning that we were in the Colored balcony. Did Atticus put us up there as a sort of—? Wasn't it right close up there with all those—? Did Scout understand all the –? Didn't make us mad to see our daddy beat? (214)

次の3例はFITである。この作品は一人称の語り手のためにnarrator's reportと FITの間で人称には変化がなく、形式上ではnarrator's reportとの違いは見られない。しかしこれらは大人のナレーターの声ではなく、物語当時の登場人物である子供の声としてのFITであることが内容その他から明らかである。7）は母を亡くしているスカウトたちにとって親代わりに等しい黒人の料理人Calpurniaがスカウトを叱った小学校初日の夕方、打って変わってスカウトに優しい言葉をかけたことに対しての子供のスカウトの分析である。いかにも幼い解釈が示されている。8）は古い南部的価値観を持つ叔母がスカウトたちの教育に口出しをし始めCalpurniaを解雇すべきだと意見する場面である。"We've got to do something about her."(136) "We don't need her now."(137)という叔母の話を漏れ聞いてスカウトは「彼女」とは自分のことかと心配する。大切な存在であるCalpurnia のことであるにもかかわらず自分に関わらなければ安心する、という幼い身勝手さがFITで示されている。9）もthese daysがFITであることを示す指針となっており、大人になりかかってゆく兄の自分に対する態度に怒る当時のスカウトの気持ちが現れている。このようにFITが使われる場面は、ナレーターとしてではなく、子供としてのスカウトの声によって当時のそのままの気持ちが示される部分である。

7）Culparnia bent down and kissed me. I ran along, wondering what had come over her. She had wanted to make up with me, that was it. She had always been too hard on me, she had

at last seen the error of her fractious ways, she was sorry and too stubborn to say so. (29)

8) Who was the "her" they were talking about? . . . I breathed again. It wasn't me, it was only Calpurnia they were talking about. Revived, I entered the livingroom. (136-8)

9) His maddening superiority was unbearable these days. He didn't want to do anything but read and go off by himself. (138)

以上この作品に使われるFISとFITを中心にその効果を見てきた。ナレーターの声に登場人物の声を溶け込ませる手段がFISやFITであるが、一人称の語り手の回想であるこの作品では、視点は登場人物としての子供のスカウトにすえながら、大人になったナレーターの声で大部分を語っている。その中で、ユーモアやからかいを含んだ部分ではFISが用いられてナレーターが読者と同じレベルで当時の自分や町の人々に対する態度を示し、またある部分では、視点が子供のそれであることをより強調するためにFITを用い、当時のスカウトそのままの子供としての声を織り交ぜる。こうすることで心に訴えかける部分とユーモラスな部分のバランスを取りながら、巧みに物語を運んでいることがわかる。

4. 結論

以上、ナレーターの声を登場人物の声の中に溶け込ませ、ナレーターと登場人物のどちらをその場面で前面に押し出すのか、その割合のバランスを微妙に操作する作者の技巧を見てきた。ナレーターと登場人物の声および心情の重なりや乖離を操作する手段として、Free indirect discourseだけでなく、その他の表出方法の選択も読者の反応や判断を左右する有効な手段として使われている例を見ることができた。コミカルな愚か者や、稚拙な愚行を面白く描くためには、FISで描かれた発話が用いられることが多い。これにより読者は、ナレーターさらには他の登場人物からの評価や解釈が加味されて聞こえる感覚を味わえるために、作者と共に内輪の情報を共有している気分を味わうことができる。FISよりも更にナレーターの介入の多い話法であるISやNRSAも、更に発話者軽視の印象を強めるために使われている例が見られた。また、直接話法も、一般的に見られる読者の共感を引き出す効果のみでなく、丁寧な提示により愚かな人物の愚かさをよりはっきりと示すことで彼らに対する判断をゆるぎないものにする効果を挙げている例を見ることができた。更に、せりふをして語らしめる、という直接話法は、ナレーターの解釈の入り込まない登場人物の発話そのものであるために、幼い登場人物の理解を超えた状況を描く際に効果的に用いられ、作者に押し付けられるのではなく、読者に自らが主体的に状況を把握しているという楽しみを味わわせてくれる。

このように作者は話法の操作によってナレーターの立ち位置を常に示して、読者の判断や評価に影響を与えている。使用されている発話と思考の表出方法を常に意識することで

物語の理解が深まり、何がおこったか、だけでない細かな登場人物同士の反応や気持ちを味わうことができる。英文の正確な読解と細やかな内容理解のためにさまざまな話法を意識することは大学レベルの学習者のreading能力の向上に有効である。学習者が小説を読む際に、常に話法に意識を向けさせることで、語法的な違いが単に形式だけの違いでなく、意味と結びついていることを意識させることができる。特にナレーターの声と紛れやすいFIS，FITに対して注意を向けさせることは、文の構造理解と意味の理解の間の密接なつながりを認識させ、英語の文法や文学への興味の糸口となれると考える。

注

1. Mchale（1978）、Toolen（2001）はこの二つをDiscourseとして扱っている。特に20世紀の作品に多く見られるのは思考内容を示すFree Indirect Thoughtであり、発話を示すFree Indirect Speechは19世紀に多い。日本語で自由間接話法という場合も、実は思考内容を示すFITを意味して使われることが多い。
2. Leech & Short（1981）ではThe Narrative Report of Speech Act が使われているが、ここではShort（1996）の名称, Narrator's Representation of Speech Actsを使用した。
3. これ以外のカテゴリーとしてMcHaleは発話の内容にはまったく触れず、They talked for one hour. などのように内容がまったく言及されずに発話の行為があったことだけを述べるものをDiegetic Summaryと呼び、NRSAにあたるものをless "purely" diegetic summaryとしている。Short（1996）では内容に言及しないものをNarrator's Representation of Speech（NRS）としてNRSAの更に左側においている。
4. ただしLeech and Short（1981）はそれ以前にもHenry FieldingやSwiftによっても断片的に使われていた述べている。また、安藤（2005: 719）はSamuel Richardsonが初出であるというVisser（1996）の説を紹介している。
5. この作品ではFITは、Elizabethに1巻で6回、2巻3巻でそれぞれ21回、13回使われる以外には数名に1回ずつ表れるのみである。FISの回数で比べると後期の*Emma*では Emmaに17回、Frank Churchill 19回、Harriet Smith 20回他と使用例がずっと多くなっていることが示されている。（Flavin, 1985: 253）
6. それをあえて試みたのがW. Faulknerの*Sound and Fury*における白痴のBenji の語りによる章だが、彼の語彙と文法でのみ語られるため、読者に対する負担は大きい。

Reference

Carter, Ronald ed.（1982）*Language and Literature - An Introductory Reader in Stylistics*, George Allen & Unwin, London

Flavin, Louise, 'The aesthetic effects of free indirect discourse in the novels of Jane Austen'（1985, dissertation）University of Cincinnati

Fludernik, Monika（2009）*An Introduction to Narratology*, London and New York, Routledge

Freeman, Donald C（1970）*Linguistics and Literary Style*, Holt, Rinehart and Winston

Leech, Geoffrey N. & Short, Mick（1981）*Style in Fiction - A linguistic Introduction to English Fictional*

Prose, Longman / Pearson Longman, London and New York
Leech, G.N. & J. Svartvik (1975) *A Communicative Grammar of English*, Longman, London
Lodge, David (1992) *The Art of Fiction*, Penguin Books
McHale, B. (1978) 'Free Indirect discourse: a survey of recent accounts' *Poetics and Theory of Literature*, 3, pp. 249-87
Mezei, K. (1996) 'Free indirect discourse, gender, and authority in Emma, Howards End, and Mrs. Dalloway' in K. Mezei (ed.) *Ambiguous Discourse: Feminist Narratology & British Women Writers*, Chapel Hill: University of North Carolina Press, 66-92
Short, M (1996) *Exploring the Language of Poems, Plays and Prose*, Longman
Short, M., E. Semino and J. Culpeper (1996) 'Using a corpus for stylistics research: speech and thought presentation', in J.Thomas and M. Short (eds) (1996) *Using Corpora for Language Research*, London; Longman, pp.110-31
Toolan, Michael (2001) *Narrative: a critical linguistic introduction* 2nd Ed, London and New York, Routledge
Wright, Laura and Hope, Jonathan (1996) *Stylistics – A practical coursebook*, Routledge, London &New York
安藤 貞雄 (2005)『現代英文法講義』開拓社
池田拓朗 (1992)『英語文体論』研究社

引用作品

Austen, Jane (1996) *Pride and Prejudice*, Penguin Classics, Penguin.
Dahl, Roald (1995) "Lamb to the Slaughter" , *After Twenty Years and Other Stories*, 金星堂
Lee, Harper (1982) *To Kill a Mockingbird*, Warner Books.
Mansfield, K. (1989) "A Cup of Tea" *The Doll's House and other stories,* 栄光社
Maugham, W. Somerset (1975) "The Escape" , *Collected Short Stories Volume One*, Pan Books Ltd.